



© 2010 Tamara Art Heritage / Victoria de Lempicka / MMI, NYC



TAMARA DE  
LEMPICKA  
et son époque

© 2010 Tamara Art Heritage Licensed by MMI  
Photo A. Blondel / Joffe

美しき挑発

本能に生きた伝説の画家

レンピッカ展

Right of Reproduction © 2010 Tamara Art Heritage / Victoria de Lempicka Licensed by MMI NYC

## 1. 開催概要

# 美しき挑発 本能に生きた伝説の画家 レンピッカ展



■開催期間／2010年5月18日(火)～7月25日(日)  
月曜日休館(祝日の場合は翌日)

■開催場所 **兵庫県立美術館** ギャラリー  
HYOGO PREFECTURAL MUSEUM OF ART  
神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1 [HAT 神戸内]

### 【交通案内】

- 阪神岩屋駅から南に徒歩約8分
  - JR神戸線灘駅から南に徒歩約10分
  - 阪急神戸線王子公園駅から南西に徒歩約20分
  - 神戸市バス・阪神バス「県立美術館前」下車すぐ
  - 地下駐車場(乗用車80台収容・有料)
- ※ご来館はなるべく電車・バスをご利用ください。  
※団体バスで越しの場合は、バス待機所のご予約をお願いします。



■開館時間 10:00～18:00 (最終入場17:30まで)

### ■入館料〔税込み〕

	一般	大学生	高校生・65歳以上	中学生以下
当日券	1,300円	900円	650円	無料
前売券 / 団体券	1,100円	700円	550円(団体) ※前売券の販売なし	—

- ※ 団体は20名以上
- ※ 障害のある方とその介護の方(1名)は各当日料金の半額  
(割引を受けられる方は、証明できるものをご持参の上、会期中美術館窓口で入場券をお求め下さい)

■お問い合わせ 兵庫県立美術館 TEL. 078-262-0901(代) www.artm.pref.hyogo.jp

■公式HP www.ytv.co.jp/lempicka (PC・携帯 共通)

- 【主催】 兵庫県立美術館 / 読売テレビ / 読売新聞大阪本社
- 【後援】 兵庫県 / 兵庫県教育委員会 / 神戸市 / 神戸市教育委員会 / フランス大使館
- 【企画協力】 NTVヨーロッパ
- 【協力】 ホテルオークラ神戸 / 京阪神エルマガジン社 / 日本航空 / 日本通運

プレス関係各社の広報用画像の使用などのお問合せは下記をお願いします

「レンピッカ展」神戸展広報事務局(平日 10:00～18:00)

〒530-0002 大阪市北区曽根崎新地2-1-13 梅田ビル402

TEL:06-6110-5110 FAX:06-4797-9208 メール:lempicka@event21.jp

## 2. メッセージ

パリ・オランジュリー美術館館長／本展監修  
エマニュエル・ブレオン

2010年、タマラ・ド・レンピッカの展覧会を日本で開催いたします。

グラマラスな絵画で知られるレンピッカは、世界的にアール・デコのアイコンとして認められている女性画家です。レンピッカの生涯はまさに伝説的で、1898年にポーランドで生まれ、サンクトペテルブルク、パリ、ニューヨーク、ハリウッドで暮らし、1980年にメキシコで没しました。彼女は、当時の芸術界と社交界に身を置きながら、自らを完璧に演出しました。アール・デコ時代を象徴する存在となったレンピッカの作品は、後期キュビズムの潮流と近代のマニエリスムに属するものですが、今日でもその新しさを失わず、まるで映画を見ているかのような印象を我々に与えます。

彼女の作品は現在、世界で熱狂的に迎え入れられ、有名人たちがこぞって収集しています。ジャック・ニコルソンやバーバラ・ストライザンドなどの大スターが作品を購入し、マドンナは傑作を所有するだけでなく、コンサートツアーでステージ演出にも使用しています。まるでレンピッカとの間に、永遠の同盟関係が打ち立てられたかのように……。

本展では、フランスを中心に欧米など世界各地の美術館や個人が所蔵するレンピッカの傑作を一堂に展示します。1920～30年代の作品を中心に約60点の油彩や貴重な素描、写真資料などにより、その生涯を辿り、あわせて1920～30年代の美術史にレンピッカという画家を位置付けなおすものです。

本展は、多くの日本の方々がレンピッカの生涯と作品の全体像に初めて接することができる貴重な機会であり、大変意義深いものとなることでしょう。

兵庫県立美術館 学芸員  
服部 正

ポーランド出身の女性画家タマラ・ド・レンピッカが活動を始めたのは、1920年代のパリでした。それは、第一次大戦の勝利といずれ訪れる経済恐慌の狭間の活気に満ちた時代、女性が社会に進出しはじめた時代、美術と工芸を統合する新しいデザイン様式「アール・デコ」が生まれた東の間の華やかな時代でした。

類まれなるバイタリティと自己演出によってパリの芸術界や社交界に花形として君臨し、アール・デコの象徴的存在と見なされたレンピッカは、裕福な貴族や文化人、美しい女性の友人／恋人たちの肖像画で人気を博しました。彼女自身の並外れた美貌でも人々を魅了し、ジャーナリズムの注目を集めたレンピッカは、後に「自動車時代の女神－鋼鉄の瞳をもつ女」とも称されました。

幾何学的な形態と、輝くように硬質な色彩で描かれた彼女のモデルたちは、最新の流行に身を包み、華麗で優雅な雰囲気の中に満ちています。憧れのファッション雑誌から抜け出したかのようなレンピッカの華やかな作品からは、堂々とした存在感と気品が感じられます。キュビズムとエコール・ド・パリの芸術を穏やかに継承した明快な色彩と構成による彼女の作品は、「狂乱の時代」と呼ばれる喧騒の一方で保守的な伝統回帰へと向かいつつあった時代の空気に見事にマッチし、熱狂的に受け入れられました。

欧米の最新の研究成果を盛り込み、日本初公開の作品約30点を含む90点以上の作品と、貴重な映像や写真資料などで構成された本展は、日本では13年ぶりの本格的なレンピッカ展となります。激動の時代を駆け抜けたレンピッカの人生とその芸術は、めまぐるしいスピードで変化する先行きの不透明な現代社会に生きる私たちに、未来へ向けての展望と勇気を与えてくれることでしょう。



### 3. 展覧会のみどころ

#### これほどの点数が一堂に会するのは極めて稀!『レンピッカ展』

レンピッカの作品はまとまった点数を所蔵、展示している美術館がない上、個人所蔵家も多く、フランス、アメリカ、メキシコなど世界中に点在しています。このため、これほどの点数が一堂に集まることは極めて稀。初期から絶頂期、そして晩年に至るまで、日本でレンピッカの画業を網羅的に観ることができるまたとないチャンスです。

#### 監修はオランジュリー美術館 館長

監修は2006年、フランスの美術館として初めてレンピッカの回顧展を開催し、成功に導いたエマニュエル・ブレオン氏(当時1930年代美術館館長、現オランジュリー美術館館長)。また、1960年代にレンピッカを再発見したレンピッカ研究の第一人者、アラン・ブロンデル氏の全面的な協力も得るなど、学術的な裏付けは十分。美術史の流れの中でレンピッカという画家を位置づけなおします。

#### 油彩約60点。日本初公開約30点、世界未発表作品も

《イーラ・Pの肖像》、《タデオシュ・ド・レンピッカの肖像》、《ガブリエル大公殿下》、《サン・モリッツ》など、レンピッカの傑作といわれる作品を含む油彩約60点を展示。うち、メインビジュアルの《緑の服の女》など、日本初公開作品も約30点。世界未発表作品《サン・ジョン・ペルスの肖像(未完)》も含まれる贅沢なラインナップです。

#### デッサン約20点、ファッション誌なども展示

レンピッカは優れたデッサンも数多く残しており、その中から選りすぐりの約20点を展覧します。また、レンピッカが表紙を描いたドイツのファッション誌「ディー・ダーメ」や関連作品も展示し、レンピッカが生きた時代を感じながら、その足跡を辿ります。

#### 作品評価額が急上昇

多くの著名人やアーティストに愛され、近年評価額が高騰しているレンピッカの作品。2009年に開催された有名オークションでも数億円もの値が付き、ますます注目度が増しています。

### 4. Tamara de Lempicka



「ロングドレスを着たタマラ」

1929年頃/ドラ撮影  
© 2010 Tamara Art Heritage Licensed by MMI  
Photo A. Blondel / D'Ora

タマラ・ド・レンピッカ(1898~1980)はワルシャワの良家に生まれ、思春期をロシアとスイスで過ごしました。情熱的な恋に落ちて18歳で弁護士のタデオシュと結婚。しかし結婚の翌年、ロシア革命でパリへの亡命を余儀なくされます。亡命をきっかけに、いっこうに働くようになった夫に生活は困窮し、好きだった画業で身を立てる決心をします。(タデオシュとは後に離婚)

レンピッカは、1920年代のパリで、その独特の画風と美貌で瞬間に注目を集めます。社交界を闊歩し、亡命貴族や財界人、文化人の肖像画を描きながら画家としての地位を築いていきました。

「女性がコルセットから解放された」時代ともいわれるその当時、レンピッカのライフスタイルは自由奔放で、私生活ではモデル達との数々のスキャンダルで浮名を流したり、まだ珍しかった自動車を運転するなど、常に流行の先端を生きました。

やがて第2次世界大戦の火種がヨーロッパで立ちのぼり、ナチの脅威が迫ると、レンピッカは2番目の夫とともにアメリカへ移住します。ハリウッドやニューヨークで創作を続けるものの、時代の変化とともに「レンピッカ」は次第に忘れ去られていきます。

再評価が始まったのは1970年代。時代が変わり、待ち受けていたかのように、再び彼女の作品が人々を魅了し、圧倒し始めたのです。

プロのカメラマンに撮らせた、ハリウッド女優のようなポートレート。セレブの一日を切りとったかのようなニュース映像。そこからは、自分の才能と魅力を誰よりも知り尽くし表現する、「セルフ・プロデュース」に長けた生き様を感じられます。その生き方そのものが、作品にも強く表現され、今の時代にも、レンピッカ特有の輝きを与えているのです。

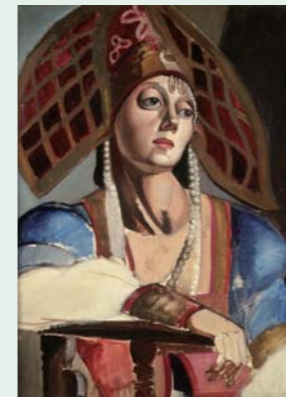
## 5. タマラ・ド・レンピッカ 年表

- 1898** ■ ワルシャワの裕福な家庭で誕生(1895年あるいは1897年にモスクワでという説もある)。5歳の頃、父親が行方不明になる。
- 1911** ■ 祖母に連れられてイタリア旅行(一説では1907年)。ルネサンス絵画とバロック絵画に出会う。
- 1912** ■ スイスのローザンヌで学校に通いはじめる(一説では1908年)。この頃キュビズム絵画に出会う。
- 1916** ■ サントペテルブルクで弁護士タデウシュ・ド・レンピッキ伯爵と結婚。
- 1917** ■ ロシアで10月革命勃発。夫は革命政府により投獄される。タマラはフィンランドに亡命、数ヵ月後に夫も出獄に成功。夫妻は1918年半ばにパリに亡命。
- 1919** ■ サントペテルブルクで始めていた絵画修行を再開。モーリス・ドニ、アンドレ・ロートに師事し、
- 1923** ■ 展覧会に出品する際は「レンピッキ」と男名で作品に署名する。
- 1925** ■ ミラノのボッテガ・デイ・ポエシア画廊で初の個展。
- 1926** ■ 肖像画の注文に応じるためにミラノを再訪。有名な詩人で政治家のガブリエーレ・ダヌンツィオが彼女に肖像画を注文するが、未完に終わる。
- 1927** ■ ボルドー国際美術展で《ピンクの服を着たキゼット》が金メダルをとり、ナント美術館が購入。美術館入りした最初の作品となる。
- 1928** ■ タデウシュと離婚。
- 1929** ■ パリのメシャン通り7番地にアトリエを購入。設計者は有名な近代建築家のマレ＝ステヴァンス。ルーファス・ブッシュの招待で、9月から翌年の1月までニューヨークに滞在する。
- 1934** ■ ラウル・クフナー男爵と再婚。
- 1935** ■ この年以來、重度の鬱病の治療のために、しばしばスイスの病院に滞在。《修道院長》のような宗教的な作品を制作する。
- 1939** ■ ナチの脅威を逃れるために、夫とともにアメリカに亡命。3年間ハリウッドで暮らす。
- 1943** ■ この頃ニューヨークに転居。
- 1949** ■ 大戦終了後、初めての外国旅行。以後、アメリカ国内、フランス、イタリア、メキシコ、キューバを旅する。
- 1953** ■ この頃抽象画にチャレンジする。その後も断続的に抽象画を試みる。
- 1959** ■ ふたたび絵のスタイルを変える。パレットナイフを駆使して、厚塗りの画風となる。
- 1961** ■ 夫のクフナー男爵が死去。
- 1963** ■ 一人娘キゼットの住むテキサス州ヒューストンに転居。この頃からメキシコのクエルナバカに定期的に長期滞在するようになる。
- 1972** ■ 画商アラン・ブロンデルがパリのリュクサンブール画廊でレンピッカの回顧展を開催。展覧会は大成功を収め、レンピッカ再評価のきっかけとなる。
- 1980** ■ 3月18日メキシコのクエルナバカで死去。彼女の遺志に従い遺灰は活火山ポポカテペトル山の火口付近に撒かれた。

## 6. 展覧会の構成

本展では油彩、デッサン、写真資料を通して、タマラ・ド・レンピッカの生涯を辿ります。さらにレンピッカの友人だった画家ルパップやブーテ・ド・モンヴェル、彫刻家シャーナ・オルロフなどの傑作を彼女の作品と比較展示することで、レンピッカの作品を1920年代、30年代の芸術の流れの中に位置づけなおします。

### プロローグ 『ルーツと修行』



《ロシア人の踊り子》

年代不明/油彩・キャンヴァス/個人蔵  
© 2010 Tamara Art Heritage Licensed by MMI  
Photo Etude Aguttès / Ph. Fuzeau  
ADAGP & SPDA

ロシア革命を逃れフランスに亡命したレンピッカは、1921年頃パリのグランド・ショーミエール美術学校でアンドレ・ロートの指導の下、絵画の修行を始めました。ロートは彼女にキュビズムから派生してさまざまなテクニックを教えます。イタリアのマニエリスム、フランス新古典主義の巨匠アングルの描線、そして装飾的キュビズムを総合しながら、レンピッカはすぐに独自の技法を生み出しました。とりわけ肖像画の分野でたいへんユニークなスタイルを創り出します。彼女の描く肖像画は一見すると冷やかかで排他的に見えながらも、実際には官能性に満ち溢れています。

### 第1部 『狂乱の時代』



《サン・モリッツ》

1929年/油彩・板/オルレアン美術館蔵  
© 2010 Tamara Art Heritage Licensed by MMI  
Photo Orléans, musée des Beaux-arts. Photo, François Lauginie  
ADAGP & SPDA

レンピッカのモデルになったのは、アフリット侯爵やエリストフ伯爵といった国際的な貴族やブルジョワでした。また、レンピッカの長年の親友であり、最愛の恋人でもあったイーラ・ペローヤ、アングルが描いた傑作《グランド・オダリスク》を髣髴とさせるマルジョリー・フェリーなど、彼女が描いた女性たちは女性の自由な生き方のお手本となり、その解放のシンボルとなりました。金髪、肉感的な唇、ものうげなまなざし。レンピッカの女性肖像画には一貫した美学が見られます。

さらにこの時代には、新たな表現方法が誕生しました。映画では「宿命の女」(ファム・ファタール)がもてはやされ、広告にはファッションモデルが繰り返し使われました。レンピッカの《サン・モリッツ》で描かれたスキーをする美女の姿は、当時のポスター芸術に触発されたものです。一方、素晴らしい少女時代の表現ともいえるべき、一人娘キゼットの肖像画シリーズも同じように魅力的で、そこにはレンピッカ芸術特有の微妙なニュアンスがうかがえます。



## 第2部 『危機の時代』



### 《修道院長》

1935年頃/油彩・裏打ちされたキャンバス/ナント美術館蔵  
© 2010 Tamara Art Heritage Licensed by MMI  
Photo Ville de Nantes- Musée des Beaux-Arts - Photographie : C. CLOS  
ADAGP & SPDA

1935年頃、レンピッカは現代生活を描くことをやめます。この頃彼女は鬱病に苦しめられ、絵のテーマも重々しいものに変化しました。宗教的なテーマの《修道院長》や《母と子》、政治的なテーマの《難民》や《移民の母(逃亡)》が描かれます。これらの作品には作者の悩みと猜疑心が反映されています。

## 第3部 『新大陸』



### 《バンジーを持つ女性》

1945年頃/油彩・キャンバス/個人蔵  
© 2010 Tamara Art Heritage Licensed by MMI  
Photo B. Friedman Ltd.  
ADAGP & SPDA

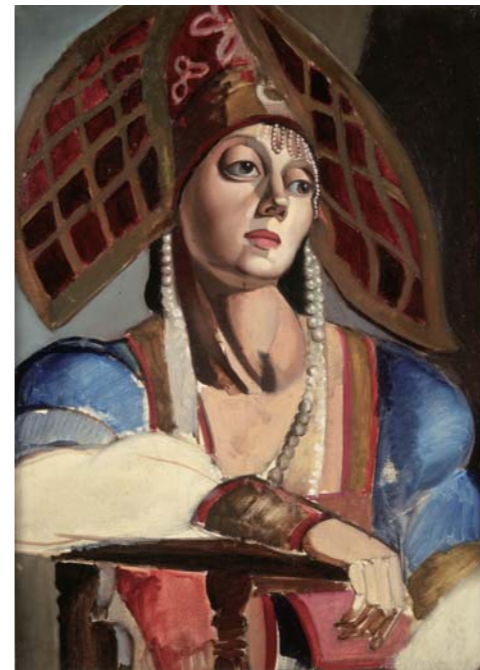
第二次世界大戦を逃れ、アメリカに渡ったレンピッカはさらにスタイルを変えます。それまで排他的だった彼女の芸術は、《バンジーを持つ女性》に見られるように古典的で優雅なスタイルへと変貌します。《メキシコ女》や《椅子の上の水差し》などの田園的な雰囲気にも包まれた作品は、1920年代や30年代の、凍りついたような印象の作品とは一線を画しています。

しかしながら1960年代に入ると、アート・シーンは抽象画やポップアート、コンセプトアートなどにとって代われ、彼女の作品は人々の記憶から忘れ去られます。

## エピローグ

レンピッカの作品に再び光があたるようになったのは1972年、パリの画廊主アラン・ブロンデル氏が開催した回顧展がきっかけでした。晩年彼女は、友人たちの依頼に応じて1920年代、30年代に自身が描いた名作のレプリカを大量に制作しました。視力が衰え、手が震えるようになって、彼女は死ぬまで絵筆を離しませんでした。本展では時代に翻弄されながらも激しく情熱的に制作活動を続けたレンピッカの作風の変化を辿りながら、彼女の作品の全貌を明らかにします。この他20点あまりの見事な素描作品、そして彼女が有名デザイナーの服を身にまとい、当時の最も偉大な写真家に撮らせたポートレート写真も展示します。これらはセルフ・プロデュースに長けていた「スター・レンピッカ」を鮮やかに魅ませます。さらに大建築家マレ＝ステヴァンスが設計したパリの彼女のアトリエの写真や、そこで制作をする姿をとらえた貴重なニュース映画も上映する予定です。

## 7. 主な出展作品



### 1. 《ロシア人の踊り子》 日本初公開

#### Danseuse russe

年代不明/油彩・キャンバス/個人蔵  
© 2010 Tamara Art Heritage Licensed by MMI  
Photo Etude Aguttes / Ph. Fuzeau  
ADAGP & SPDA

レンピッカはサンクトペテルブルクで育ち、その地で受けたロシア芸術の影響は、彼女の絵画の基礎となった。この《ロシア人の踊り子の肖像》は1910～20年代にパリを席巻したロシア・バレエ団にちなんで描かれた。踊り子に扮したモデルはおそらく大指揮者トスカニーニの娘ウラリー・トスカニーニであろう。彼女の結婚相手、カステルバルコ伯爵は1925年にミラノでレンピッカの最初の個展を開催した画商である。(E・B)

### 2. 《ピンクの服を着たキゼット》

#### Kizette en rose

1926年頃/油彩・キャンバス/ナント美術館蔵  
© 2010 Tamara Art Heritage Licensed by MMI  
Photo RMN / Gérard Blot / distributed by DNPartcom  
ADAGP & SPDA

勤勉な娘は読書を中断して、母親であるレンピッカを見つめている。彼女はきれいなプリーツのワンピースを着て、白いソックスをはいている。キゼットは母親が定めた画面の中におさまるために、体を丸めているかのようだ。しかし娘のまなざしには、人を挑発するような様子があり、よく見ると、彼女の靴の片方はなくなっている。子供時代から娘時代への移行期を表現するこの奇妙な作品は、レンピッカの最高傑作のひとつに数えられる。(E・B)



### 3. 《タデウシュ・ド・レンピッキの肖像》

#### Portrait de Tadeusz de Lempicki

1928年/油彩・キャンバス/1930年代美術館蔵  
© 2010 Tamara Art Heritage Licensed by MMI  
Photo Collection Centre Pompidou, Dist. RMN / Droits réservés / distributed by DNPartcom  
ADAGP & SPDA

男は黒く大きなコートを着て、手にシルクハットを持っている。外出しようとしているのだが、あたかも妻であるレンピッカに別れを告げているかのようである。レンピッカは結婚指輪をはめた夫の左手を、未完のままで残すことにした。実際、タデウシュはこの絵のためにポーズをとった時に、タマラと離婚の瀬戸際にいたのだ。レンピッカが描く男たちは大体において暗いトーンで描かれており、そこにはノスタルジーと不安が込められているかのようだ。(E・B)





#### 4. 《サン・モリッツ》

##### Saint Moritz

1929年/油彩・板/オルレアン美術館蔵  
© 2010 Tamara Art Heritage Licensed by MMI  
Photo Orléans, musée des Beaux-arts. Photo, François Lauginie  
ADAGP & SPDA

1920年代の末頃、レンピッカの才能は最大限に花開いた。この頃、彼女が描く女性像は若さとモダンさ、そして当世風な事物への嗜好を示す楽天的なものであった。この絵に描かれたスキーをするエレガントな女性は、サン・モリッツでバカンスを過ごすスポーツ好きの女性である。1960年代にレンピッカを再発見したパリの画商アラン・ブロンデル氏が指摘するように、まなざしはおそらく競技場の神々が行進するであろう天上界に向けられている。優雅で気取りのないポーズは、レンピッカのいまだ憂いのない洗練された時代の典型的な作風である。(E・B)

#### 5. 《緑の服の女》 日本初公開

##### Jeune fille en vert

1930年/油彩・合板/ボンビドゥーセンター蔵  
© 2010 Tamara Art Heritage Licensed by MMI  
Photo Collection Centre Pompidou, Dist. RMN / Droits réservés / distributed by DNPartcom  
ADAGP & SPDA

モデルはレンピッカの娘、キゼットである。この作品においてキゼットは初めて官能的で、意気揚々とした姿で描かれている。緑のドレスは背後ではためき、身体をぴったりと包み、乳房とへその形をあらわにしている。優雅な帽子と手袋をつけた彼女は、究極の女性らしさを体現している。レンピッカは自分自身の若い頃を思い出し、過去の自分を投影し描いたに違いない。つまり、この作品は自画像でもあるのだ。なお、この作品は彼女の最高傑作の一枚として世界の美術館で展示されている。(E・B)



#### 6. 《イーラ・Pの肖像》 日本初公開

##### Portrait d'Ira P.

1930年/油彩・板/個人蔵  
© 2010 Tamara Art Heritage Licensed by MMI  
Photo Archive A. Blondel / L. S. Jaulmes  
ADAGP & SPDA

「恋愛絵画」の傑作であるこの肖像画において、レンピッカは愛人の肉体的魅力を引き立てるため、絹のドレスのなめらかな肌触りを見事な技巧で表現している。レンピッカがこよなく愛したカラーの花弁はイーラ・ペローの肉体を包む白いドレスと同じくらいのなまめかしさで芯を取り囲んでいる。くっきりと対角線で仕切られた構図、画面いっぱいに描きこまれたモデルの身体、二つの補色の使用など、独自の絵画技法が最大限に活かされたレンピッカ絶頂期の名作である。(A・B)

#### 7. 《カラーの花束》 日本初公開

##### Arams

1931年頃/油彩・板/個人蔵  
© 2010 Tamara Art Heritage Licensed by MMI  
Photo Sotheby's NY  
ADAGP & SPDA

もしレンピッカが紋章を作ったなら、その中心にカラーの花束を据えたに違いない。彼女の作品にはそれほど頻繁にこの花が登場する。レンピッカがこの花をこよなく愛したという事実は、いったい何を意味しているのだろうか。カラーの白い花弁はもちろん無垢をあらわしている。それに対し、その花弁の中央の膨らんだ芯は、肉欲のイメージそのものなのだ。この花は言わば彼女の苦悩に満ちた精神を反映するもので、聖性と淫乱さの危うい結合を意味しているのである。(E・B)



#### 8. 《修道院長》

##### La Mère supérieure

1935年/油彩・裏打ちされたキャンヴァス/ナント美術館蔵  
© 2010 Tamara Art Heritage Licensed by MMI  
Photo Ville de Nantes- Musée des Beaux-Arts - Photographie : C. CLOS  
ADAGP & SPDA

フランス17世紀、ヤンセン主義(キリスト教思想。人間の意志の力を軽視し、腐敗した人間本性の罪深さを強調した)の画家フィリップ・ド・シャンパーニュの絵画を髣髴とさせるこの作品は、レンピッカの最高傑作の一つに数えられる。描かれた頃、レンピッカは鬱病に苦しんでおり、絵に救いのメッセージを託したものと思われる。すなわち、この女子修道院長の涙は、レンピッカ自身のものであったとも言える。クローズアップの構成で、白と黒が悲しみにやつれた顔を取り囲んでおり、30×20cmという小さなサイズにもかかわらず、力強い印象を与える。(E・B)



#### 9. 《パンジーを持つ女性》 日本初公開

##### Jeune fille aux pensées

1945年頃/油彩・キャンヴァス/個人蔵  
© 2010 Tamara Art Heritage Licensed by MMI  
Photo B. Friedman Ltd.  
ADAGP & SPDA

この作品が描かれた1945年頃、レンピッカはニューヨークで、孤立した生活を送っていた。肖像画の注文が途絶え、彼女は理想化された若い娘の像を繰り返し描くようになった。この作品にみられるようなパターン化された女性の顔は何度も描いているうちにいつしか強迫観念となり、彼女はルネサンス期の巨匠達の作品を下敷きにした絵画をたくさん描くようになった。第二次世界大戦が終結した時、レンピッカはあらゆる分野で世界が変化した事に気づき、苦々しく感じた。芸術の分野でも彼女は時代に取り残されたのである。(A・B)

■ 作品解説: (E・B)= エマニュエル・ブレオン / (A・B)= アラン・ブロンデル  
Right of Reproduction © 2010 Tamara Art Heritage / Victoria de Lempicka Licensed by MMI NYC





# トピックス

## ■ 展覧会の顔・音声ガイドナビゲーターに、夏木マリさんが決定！

音楽や舞台、映画、映像など常に新しいクリエイションを続ける夏木マリさん。

圧倒的な存在感とセルフ・プロデュースの力は、レンピッカの持つイメージにぴったり。

「レンピッカは好きな画家です。以前、アメリカで上演されたレンピッカを題材にした舞台にも熱狂しました」と語る夏木さん。レンピッカの自由奔放な生き方や美学、そして本人の言葉を織り込みながら、夏木さんがドラマティックに作品を解説します。



夏木 マリ

'73年デビュー。'80年代より活動の幅を広げ、演劇など多岐に渡るジャンル、アートシーンで活躍。'93年から続くコンセプトアートシアター「印象派」では身体能力を究めた芸術表現を確立、自ら演出にもあたる。パフォーマンス集団「MNT」を主宰するほか、ブルースバンド「ジビエ・ドゥ・マリ」で3枚目のアルバム「One of Love」をリリースした。PVでは監督も務め、'09年より途上国の支援をするため、「One of Love」プロジェクトを始める。近著に「泣きつ面にマリ」。

物腰強く生きた女性としても、画家・タマラ・ド・レンピッカのファンである。

ウォーホールなど脚光を浴びている絵は大嫌いだったらしく、「私は社会から少し外れた周辺で生きている」といいながら、歳を重ねてもなおお堂々としていたレンピッカ。

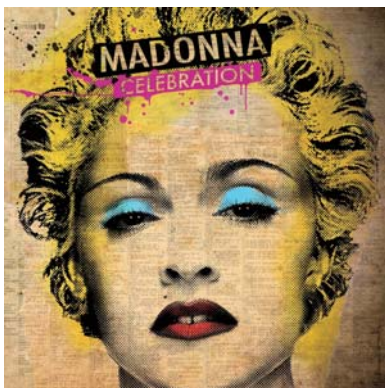
'60年代、若者たちは彼女の作品を、再発見した。

2010年、私たちはレンピッカの美德を再発見する。

アール・デコの官能を今、再び体験したい。

夏木マリ

## ■ テーマソング決定！マドンナ「VOGUE」



マドンナ初のオールタイムベスト《セレブレイション》

CD2枚組ベスト ¥3,480(税込) /

1枚組 ¥2,580(税込) 発売中

また発売中のベストDVDでは、レンピッカ作品が登場する「Vogue」や「Open Your Heart」も収録され、見逃せない。

DVD2枚組 ¥5,200(税込)

<http://www.wmg.jp/madonna/>

マドンナといえば、言わずと知れた「クイーン・オブ・ポップ」。

1982年のデビュー以来、次々に世界的な大ヒット作を生み出している。

女性ナンバーワン・エンターテイナー。

ジャック・ニコルソン、アンジェリカ・ヒューストンとともにマドンナのレンピッカ好きは有名で、傑作を数点所有しているだけでなく、それらを自らのコンサートやPVにも使用するほどです。

そしてこの度、PVでレンピッカ作品が登場するマドンナの往年の名曲「VOGUE」が本展のテーマソングに決まりました！

# トピックス

## ■愛蔵版 展覧会カタログ。石岡瑛子さん、特別インタビューを掲載

世界屈指のアートディレクター石岡瑛子さんは、1980年代に日本で初めてレンピッカを広く紹介した人物と言えます。『肖像神話-迷宮の画家タマラ・ド・レンピッカ』（1980年 パルコ出版・絶版）で彼女はメキシコに最晩年のレンピッカを訪ね、5日間にわたって自宅に宿泊してインタビューを敢行。自らブックデザインや構成も担当しました。

本展のカタログでは、石岡さんに特別インタビューを実施、30年ぶりにレンピッカへの思いを語ってもらいます。



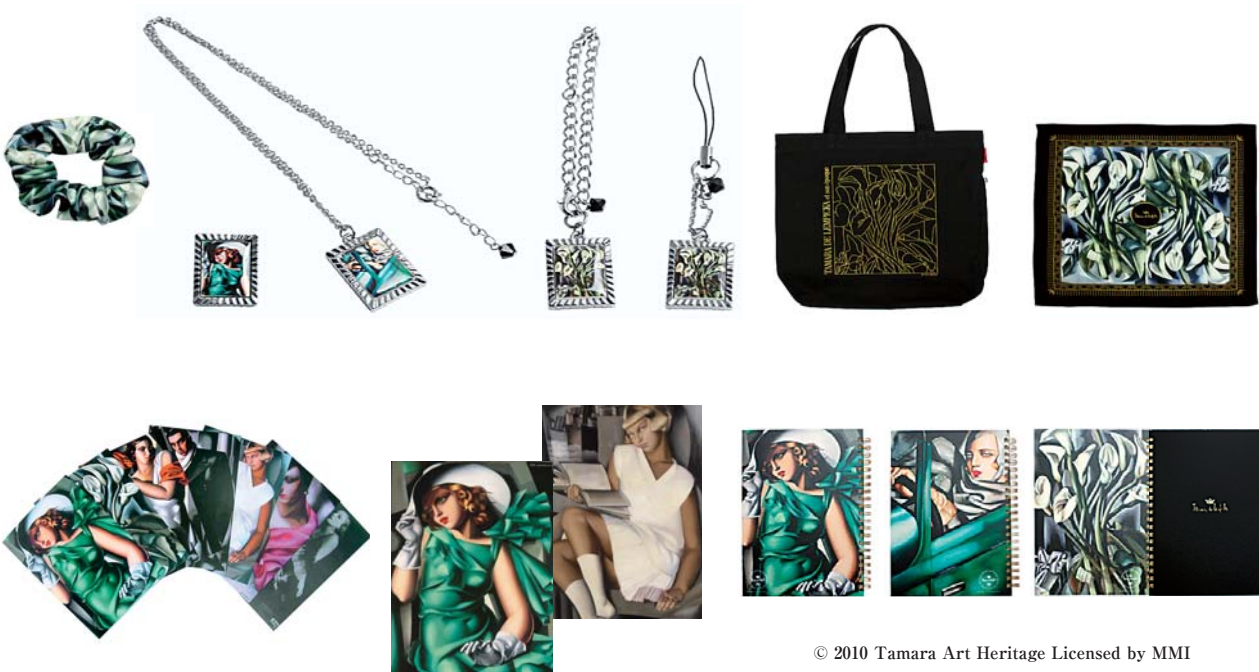
Photo © Brigitte Lacombe

### 石岡瑛子

東京生まれ。グラフィックデザイナー、アートディレクターとして1970年代にセンセーションを巻き起こす。'80年代に入ってニューヨークに拠点を移し、映画、演劇、オペラから展覧会、ミュージックビデオ、サーカス、オリンピックまで幅広いプロジェクトの創り手として国際的に活躍。アカデミー賞、グラミー賞など多数受賞。'92年、ニューヨークアートディレクターズクラブ名誉殊勲賞により殿堂入り。'02紫綬褒章受賞。'08、北京オリンピック開会式のデザインディレクターの一人に選ばれる。'10年、ブロードウェイミュージカル「スパイダーマン」のコスチュームデザインを担当、注目を集めている。

## ■充実したラインナップのオリジナルグッズ

レンピッカの作品と、彼女の生き方からインスピレーションを得て生まれたミュージアムグッズを多数ご用意いたします。会場でしか手に入らないオリジナルグッズの数々にも是非ご期待下さい。



© 2010 Tamara Art Heritage Licensed by MMI

※デザインはイメージですので変更になる場合があります。



# トピックス

■ファッション・デザイナー桂由美さん、  
レンピッカ作品《カラーの花束》をモチーフにドレスをデザイン。  
2010年1月のパリ・オートクチュールコレクションで発表!



Designed by YUMI KATSURA

※このデザインはラフ案であり、変更されることがあります。  
※《カラーの花束》の図版は、作品解説ページをご参照ください。



桂 由美

東京生まれ。共立女子大学卒業後、フランスへ留学。1964年日本初のプライダルファッションデザイナーとして活動開始。日本のプライダルファッション界の第一人者であり、草分け的存在。'93、外務大臣表彰を受賞。'99年、東洋人初のイタリアファッション協会正会員となり、'03年からは毎年パリオートクチュールコレクションに参加。'05年7月、YUMI KATSURA PARIS店をパリのカンボン通りシャネル本店前にオープンするなど世界的な創作活動を展開している。

「タマラ・ド・レンピッカ」。彼女の作品はもちろん、彼女の容姿やファッション、その生涯は私がファッションを学ぶため、パリに留学していた頃から、非常に気になる存在でした。

そんな彼女との接点が今回の展覧会で生まれたことを嬉しく思います。

私は2003年からパリ・オートクチュールコレクションに日本人としてただ一人連続参加しています。10回目となる2010年1月のテーマは「ENCHANTED FOREST」。地球環境の悪化や温暖化をくい止めるためファッションを通じて、自然の美しさやエコ活動の必要性をアピールしたいと思っています。

今回の「レンピッカ展」は、彼女の代名詞とも言えるアールデコの作品や肖像画が中心とのことですが、その中で唯一、今回の私のパリコレ・テーマに通じるレンピッカ作品《カラーの花束》がありました。この作品を私なりに解釈し、したたかさを兼ね備えた、女の生命力を感じさせる美しさを表現したドレスにしたいと思い、デザインしました。

桂由美